

## 子どもの本を読む大人・

### 大人の本を読む子ども

水越 規容子

二〇〇九年を振り返るに、社会面ではなんといいてもリーマンショック以降の社会不安や貧困の可視化、そこに権与党の不甲斐なさへの失望と危機感が輪をかけて、国民が「NO」を突きつけた結果の政権交代が象徴的だった。長く続いた自民党の合法的独裁がひとまず終わったとはいえ、相変わらずの景気低迷・雇用不安にデフレ、経済格差に比例する学力格差などなど、日本全体を覆う逼塞感はますます強まっている。これからどういう方向へ進むのかまだわからないが、児童文学のなかの家族のあり方や子どもたちの描かれ方に、着実に影を落とし始めていることは確かだ。出版界での話題はといえば、加速される出版不況、電子メディア化の動き、そこにあだ花のごとく一時咲いた『1

Q84』のミリオンセラーが印象的だが、子どもの本と大人の本のボーダーレス化にマルチメディア化の波が加わり、ますます拍車がかかってきたのも特徴のひとつと言える。児童文学・YA出身の作家が一般文芸書分野で人気・実力を蓄えて離れていった一方で（森絵都・梨木香歩）、一般文芸書の新進人気作家が相次いで一〇代を描いた作品を発表した。今までも重松清や石田衣良が中高生を描いていたのだが、今年はとりわけ女性作家が目立った。

### 人気作家の描く一〇代

筆頭は川上未映子の『ヘブン』（講談社）。クラスで激しいイジメの対象となっている斜視の少年とやはり女生徒たちから疎んじられている少女が、お互いの辛さを分かち合いながらなんとか学校生活を生き抜いていくのだが、やがて大きな試練が立ちふさがる。それぞれの背景には父親の事業の失敗や離婚・再婚といった現代社会のキーワードが散りばめられ、なるほど時代の閉塞感がそのまま凝縮している。しかし中学生たちはこんなにも心の奥に「悪意」を秘めているものだろうか、こんなにも自分と違う他者に対して残酷になれるものだろうか、と疑問にも思う。ここには問題の解決は何も示されず、ただ少年が自らの変身を決意することで終る。

小川糸の『ファミリーツリー』（ポプラ社）と青山七恵の